愛知工業大学研究報告
第２７号Ａ　平成４年

奇妙な出会・ハーディからオウエンまでの戦争詩（2）

サスーンとオウエン

吉　賀　憲　夫

STRANGE MEETINGS:

WAR POEMS OF HARDY TO OWEN

PART 2. SASSOON AND OWEN

Norio YOSHIGA

Sassoon's meeting with the First World War brought him anger; anger for politicians, bishops, military caste and other social establishments. His poems are satirical as well as ironical. "'They'" is an excellent example of the kind. A bishop's deceptive remark at the last line of the poem will bring us to a big and fundamental question that for whom and for what soldiers must fight. His apocalyptic poem "Enemies" reminds us Owen's "Strange Meeting." It is a poem of reconciliation among soldiers who killed each other.

Owen became a poet by the war. He was like neither Brooke nor Sassoon. The war was a bitter but heroic trial for Brooke to identify himself with England. Sassoon tried to reject the war with anger. Owen, however, accepted it with hopelessness. His rage was too furious to criticize the long standing establishments which Sassoon got angry with. He blamed the sun, the mother of life, for the pity of war in his "Futility." He cursed the Creation and the human existence itself because of war. "Strange Meeting" is one of the best examples of all his poems that expressed "the pity of war."

奇妙な出会・ハーディからオウエンまでの戦争詩（2）

サスーンとオウエン

吉賀憲夫

第一次大戦は一九一四年八月一日から始まった。統一後のドイツは領土と経済の拡張を計り、当然のごとく英国、フランス、ロシアは三国協商（一九〇七年）を結びこれと対抗したが、一九一四年六月オーストリアの王子が暗殺されたことをきっかけとして八月に大戦に突入していった。

戦争となると多正面作戦を強いられるドイツは、いわゆるシュリーフェン・プランで地政的なハンディキャップを克服しようとした。これはドイツ参謀総長であったシュリーフェン伯爵の立案した計画で、一種の「時間差攻撃」であった。ドイツの場合はフランスに対する西部戦線とロシアに対する東部戦線の二正面作戦を遂行しなければならないが、まず戦争突入とともに全戦力を西部戦線に向け短期にフランスを攻略し、ロシアが動員を完了する頃には西部戦線の兵力を全て東部戦線へと集中し、これを撃破しようとするものであった。この作戦の成否は西部戦線での短期決戦にかかっていたが、パリのすぐそばまで進攻したドイツ軍は、マルヌ河畔で一九一四年八月末から九月一三日にかけて戦われたいわゆるマルヌの会戦で敗退したため、この計画は早くも破綻してしまった。後は両軍大きく翼を広げた形でにらみ合い、長期消耗戦となっていった。

西部戦線での長期の塹壕戦は兵士に想像を絶する肉体的、精神的苦痛を与え、前例のない死傷者を出した。そのような中で、この戦争に疑問を持つ者も現れた。シーグフリード・サスーンもその一人であった。

サスーンは一八八六年、英国のケント州に生まれ、ケンブリッジのクレア・コレッジに学び、将校として大戦に参戦したが、彼の反戦的言動もあり、負傷後本国に送還され、エジンバラ近郊の病院に移された。戦後、自伝的小説三部作を執筆するが、その二作目、『ある歩兵将校の回想』の中で、彼は軍に提出する反戦反軍声明の骨子に考えを巡らす自己の分身である将校シャーストンの姿を描いている。

Something must be put on paper, however, and I re-scrutinized the rough notes I'd been making: Fighting men are victims of conspiracy among (a) politicians; (b) military caste; (c) people who are making money out of the War.（注1）

（しかし何かを紙の上に書かねばならない。そして私は今書いている素案を再び詳細に検討した。「戦闘員は以下の犠牲者である。(a)政治家 (b)軍階級制度 (c)この戦争で一儲けしている者ども。」）

ここには凄惨な不毛の戦いへの疑問と政治家や軍への怒りに目覚めていく将校シャーストンが描かれているが、サスーンはまた彼の詩『「かれら」』で若者を戦争に駆り出す側、ここでは宗教界の主教の誼瞞に対

して冷笑的な疑問を投げかけている。

The Bishop tells us: 'When the boys come back
'They will not be the same; for they'll have fought
'In a just cause: they lead the last attack
'On Anti-Christ. . .

(" 'They' ," 11.1-4.)

(主教は我々に言った、「若者らが帰ってくるときは
彼らは別人となっているだろう。なぜなら彼らは
正義のために戦うのであり、反キリスト教徒どもと最後の
一戦を交えるのだから・・・」)

『「かれら」』(一～四行)

若者を戦争に送り出す主教は、この戦争を黙示録の中の反キリスト教徒(Anti-Christ)に対する戦いであると景気づけるのだが、演説する主教とそれを聞く者との間には、もうすでに敵(they)と味方(us)の感情が生まれている。ちなみに主教は"they"という言葉を最初の三行で三度も使っている。

主教の「別人」という言葉をとらえて、これに反論するかのように若者は「ぼくらはみんな別人"We're none of us the same!"(注二)」と言う。そして戦争のため心身ともに「別人」となったジョージ、ビル、ジム、バートの症状を列挙し、主教の言葉に対する最後の抵抗として、「軍隊に行って/少しも変わらない奴なんていやしません。"you'll not find / A chap who's served that hasn't found some change."(注三)」と言う。すると主教は答えて言う、「神のみわざは奇なるかな。"The ways of God are strange!"(注四)」と。この言葉は人を喰ったというか、主教の抜け目なさというか、また既成勢力のしたたかさというか、若者たちと主教との間の断絶を示す皮肉に満ちた言葉である。また主教の最後の言葉"strange"はハーディの『鼓手ホッジ』における"strange"と共通するアイロニーをも感じさせる。

この詩の表題『「かれら」('They')』とは若者を戦場へと送り込む内なる敵としての政治家、軍上層部、宗教界そして戦争で一儲けを試みる者どもであり、サスーンにとってもっとも非難すべき対象であり、また彼の怒りの対象でもあった。この詩の表題が括弧付きの「かれら」であることからも分かるように、たいへん皮肉に満ちたタイトルであるといえよう。決して上等の詩とはいえないが、『将軍"The General"』もサスーンにとっての「かれら」のその一例である。

「おはよう、おはよう」と愛想を振りまく将軍、そして彼が微笑みかけた兵の大半はもう死んでいる。兵は彼の参謀らが無能な豚だと罵るが、将軍自身を悪くは言わない。背嚢をしょい、ライフルを担ってアラスへと重い足どりで行く途中、「あれは陽気な親父さんだ」とハリーはジャックに言ったが、結局将軍はまずい作戦で二人とも殺してしまった、という内容である。軍上層部への不信が表れている作品である。

サスーンはオウエンの『奇妙な出会』に似た作品を書いている。オウエンのその作品ほど完成度の高いものとは言えないが『敵"Enemies"』という一種の黙示録的作品がそれである。

He stood alone in some queer sunless place
Where Armageddon ends. Perhaps he longed
For days he might have lived; but his young face
Gazed forth untroubled: and suddenly there thronged
Round him the hulking Germans that I shot
When for his death my brooding rage was hot.

He stared at them, half-wondering; and then
They told him how I'd killed them for his sake—
Those patient, stupid, sullen ghosts of men;
And still there seemed no answer he could make.
At last he turned and smiled. One took his hand
Because his face could make them understand.（注五）

（世界最終戦争が終わったある奇妙な陽の当たらない場所に
彼は一人で立っていた。たぶん彼は彼が生きたかも知れない
日々を想い焦がれていたのだ。しかし彼の若い顔は
静かに前方を見つめていた。すると突然、彼が殺された事で
私の心の中にわだかまっていた怒りが爆発し、私が撃ち殺した
ドイツ兵たちがヌーと現れ彼のまわりに群がった。

彼は、半ばいぶかしながら、彼らをじっと見た。そしてそれから
彼らは如何に私が彼のために自分らを殺したかを彼に告げた——
これらの忍耐強い、愚かな、すねた人間の幽霊たち。
そしてまだ彼は答を見つける事が出来ないようであった。
ついに彼は振り向いて微笑んだ。一人が彼の手をとった、
なぜなら彼らは彼の顔が判ったから。）

アルマゲドンが終わった後の地獄を想わせるような陽の当たらない場所に「彼」と「私」と、私が殺した「ドイツ兵達」の三者がこの詩には登場する。「私」はある《怒り》にまかせてドイツ兵を殺したことになっている。おそらく「彼」はその「ドイツ兵」に殺されたのであろうし、また「私」もやはり死んでいるのであろう。皆が殺されていて、その彼らが再会するというシチュエーションは後述するオウエンの『奇妙な出会』と同じである。聖書の黙示録で語られる善と悪の世界最終戦争を意味するアルマゲドンという言葉がこの詩全体に聖書の世界の影を投げかけている。ついにドイツ兵の亡霊達が気づいた顔とは、彼らがその手をとったという「彼」とは言うまでもなくキリストのことであろう。「彼ら」がそれに気づいたとき、「彼（キリスト）」は私の方に振り向き微笑み、ここに敵であった「私」と「ドイツ兵」は「キリスト」を介し和解したことが暗示される。しかしサスーンにおいては敵、味方の意識がかなり強く、キリストを想わせる「彼」を殺したのは「ドイツ兵」、「彼」の擁護者としては「私」という意識が濃厚に存在している。その点、『奇妙な出会』で「ドイツ兵」という語を慎重に、また賢明に避けたオウエンと大いに異なると言える。

2

「ウィルフレッド・オウエンは戦争をとおして詩人となったと私は考えたい。“Owen, I am inclined to think, was made a poet by the war.”（注六）」とセシル・デイルイスは彼の『詩への希望』の中で述べているが、彼ほど「戦争詩人」と呼ぶにふさわしい者はいないかもしれない。ちなみに戦争詩人に対する評価の厳しいイェイツは、彼の編纂した詩集にオウエンの詩は一編すら採用しなかった。

ウイルフレッド・オウエンは英国シュロップシャーのオズウエストリーに一八九三年に生まれ、ロンドン大学に学んだが、一九一三年病の後フランスのボルドーで家庭教師をしながらキーツを意識した詩作を行い、詩集の刊行を準備していた。一九一五年芸術家ライフル部隊に入隊、一九一六年六月マンチェスター連隊に配属、同十二月フランスへ渡る。ソンム戦末期の一九一七年春季攻勢でシェル・ショック、いわゆる戦争神経症となり本国のエジンバラ近くの病院で療養中、戦争詩人シーグフリ

ード・サスーンと出会う。彼との出会はオウエンの詩にたいへん大きな影響を与えた。周囲の者は彼に安全な事務系の職を与えようとしたが、彼はこれを振り切り、中隊指揮官として一九一八年八月フランス戦線に復帰し、同年十月戦功勲章を授けられた。

彼の初期のキーツ的な詩風に大変化をもたらしたものは正に戦争そのものであり、具体的には彼が投入され、第一次大戦最悪の消耗戦となったソンムの戦いであった。開戦三年目の一九一六年連合国はフランスのソンム地方で英国の津々浦々から志願してきた若者の兵からなる部隊を総動員し、これを基幹として大攻勢へと転じた。しかし彼我ともさしたる戦果はなく、いたずらな消耗戦に終わり、結局ベルダン要塞の攻防は敵味方八十万人の被害を出し、ソンムの会戦ではそれは両者合わせて百二十万人となった。この不毛の戦いに斃れた者への挽歌を、オウエンは皮肉を込めて「賛歌（Anthem）」として歌う。

What passing-bells for these who die as cattle?
　Only the monstrous anger of the guns.
　Only the stuttering rifles' rapid rattle
Can patter out their hasty orisons.
No mockeries now for them; no prayers nor bells,
　Nor any voice of mourning save the choirs,—
The shrill, demented choirs of wailing shells;
　And bugles calling for them from sad shires.

（"Anthem for Doomed Youth," ll. 1-8.）

（家畜のように屠殺されて行くこれらの者にどんな弔いの鐘があるのか。
　あるのはただ恐ろしい大砲の怒りだけだ。
　ライフル銃のどもるような速射音だけが
彼らの急ぎの祈りを唱えることができる。
彼らをだますものは今はもう何もいらない、祈りも鐘も、
　聖歌隊のほかは悔やみの言葉もいらない—
悲しみに泣き叫ぶ砲弾の甲高い、狂気の聖歌隊、
　それに悲しみの故郷から彼らを呼ぶラッパ以外は。）

『戦争で斃れた若者への賛歌』（一～八行）

これが人間が二十世紀になり初めて経験した近代戦の姿であった。戦争という恐怖と怒りの前に人間は虫ケラのように殺されていく。何のためにこれらの者は生まれてきたのか。この様な悲惨な死を味わうためにか。もはや生は輝く希望ではなく、唾棄すべきものであった。この絶望感にオウエンは生命の恵みの元である太陽でさえ呪い、皮肉を浴びせかけないではおけなかた。

Move him into the sun—
Gently its touch awoke him once,
At home, whispering of fields unsown.
Always it woke him, even in France,
Until this morning and this snow.
If anything might rouse him now
The kind old sun will know

Think how it wakes the seeds,—
Woke, once, the clays of a cold star.
Are limbs, so dear-archieved, are sides,
Full-nerved -- still warm — too hard to stir?
Was it for this the clay grew tall?

-- O what made fatuous sunbeams toil
To break earth's sleep at all?（注七）

（かれを日の当たるところへ移してやれ。
太陽の光はまだ種蒔かぬ畑にささやきながら
かってかれを故郷で起こした。
いつも太陽はかれを起こしたのだ。フランスにおいてでさえも、
今朝までは、この雪の降るまでは。
今、もし何かがかれを立ち上がらせるとすれば
あの親切な昔なじみの太陽が知っているだろう。

考えてみよ。いかに太陽が種子を目覚めさせるかを―
冷たい星の土くれを、かっていかに目覚めさせたかを。
こんなにも立派になった手足は、いっぱいに神経のはりめぐらされた、
まだ暖かい、胴体は、あまりにも堅くなってしまって動かないのか？
こんなためであったのか、この土くれが背高く成長したのは？
―― ああ、一体何が愚かな太陽の光にいやしくも
地球の眠りを打ち破る徒労をさせたのか？）

セシル・デイルイス（C. Day Lewis）は「この詩を完璧と呼ばずに何を完璧と呼べようか。“It is difficult to call this anything but a perfect poem.”（注八）」と言ったが、この詩は大変素朴、直裁な比喩で人間存在そのものの意味を問いかけている。その素朴さは、あまりにも明白な真実と怒りを率直に表現している。彼の遣り所の無い怒りが、敵や国家や政治家にではなく、生命の根元たる太陽に向けられるところに、彼のあまりにも深い絶望が顔を覗かせている。ここにはブルックの死に対するロマンティシズムや主として支配階級を代表する愛国心はない。また前述したイェイツのアイルランド人の飛行士の詩に見られるような、戦争そのものから距離を置き、冷静に客観的に見ようとする態度もここにはない。サスーンのように怒りを政治家や軍部といった既成権力機構にぶっつけるわけでもない。そのような深い絶望にある兵士が見る夢は、自分達を救ってくれるキリストのことだ。

I dreamed kind Jesus fouled the big-gun gears;
And caused a permanent stoppage in all bolts;
And buckled with a smile Mausers and Colts;
And rusted every bayonet with His tears.

And there were no more bombs, of ours or Theirs,
Not even an old flint-lock, nor even a pikel.
But God was vexed, and gave all power to Michael;
And when I woke he'd seen to our repairs.（注九）

（私は夢を見た、親切なキリストが大砲の装置を辱めた事を、
またすべての銃の遊底を永遠に塞いだ事を、
また微笑みながらモーゼル銃やコルト銃を使えなくした事を、
また御自らの涙で銃剣を錆らせた事を。

そして味方も敵ももはや爆弾は無くなってしまった、
旧式の火打石銃さえも、またピッケルさえも、
しかし神は困られた。そこで聖ミカエルに全権を与えられた。
そして私が目覚めたとき、我らの武器を修理する彼を見たのだ。）

夢すらも裏切られ、神すらも信じる事のできない深い絶望感が皮肉た

っぷりにここには描かれている。誰を責めれば良いのか。この悲惨は神の与えられた試練なのか。兵士達は恐怖に弄ばれ、いたずらに負傷し、死んで行くのである。それが戦争の真実であり哀れさだと彼は言うのである。

3

ペンギンブックスの『第一次大戦戦争詩人（The Penguin Book of First World War Poetry）』の編者、ジョン・シルキンは戦争詩の展開を四段階に分類し、第一段階を愛国詩、第二段階を戦争への怒り、第三段階をあわれみ（compassion）、第四段階を第二、第三段階の怒りとあわれみが相互に融合したものと考え、第三段階の詩人としてオウエンを位置づけている（注十）。彼が生前自分の詩集のために準備した「序文」に、「私の主題は戦争であり、そして戦争の哀れさである。詩はその哀れさの中にある。“My subject is War, and the pity of War. The Poetry is in the pity.”（注十一）」と書いているが、それは彼の作品『奇妙な出会“Strange Meeting”』に遺憾なく発揮されている。

It seemed that out of battle I escaped
Down some profound dull tunnel, long since scooped
Through granites which titanic wars had groined.
Yet also there encumbered sleepers groaned,
Too fast in thought or death to be bestirred.
（“Strange Meeting,” ll. 1-5.）

（私は戦争から逃げだし、太古の巨人達の
戦争で花崗岩に抉られたある深い物憂い
トンネルを降りて行ったように思う。
しかしそこもまた呻き眠る人でいっぱいであった。
しっかりと思いか、または死に捕らえられて身動きすらできずに。）
『奇妙な出会』（一～五行）

「私は戦争から逃げだして来たように思う」と、始まる第一行目から「逃げる」という言葉が「私」と「戦争」との関係を暗示させる。戦線からの逃亡は明らかに罪であり、不名誉である。しかし「私」は逃げたのであり、後で分かるが、行き着いた先は地獄であった。ここにまず大きな皮肉がある。兵士にとって戦争から逃れることのできるのは死だけということである。キーツの『ハイピーリオン』を彷彿とさせる「巨人達の戦争“titanic wars”」という言葉は戦争による無惨な死は太古の昔からあったことを、またそれは半ば人間の宿命でもあることを印象づける。「私」はそこにも地上の戦場と同様に呻き眠る人々でいっぱいであることを発見する。そして「私」はそこで一人の若者と出会うことになる。

one sprang up, and stared
With piteous recognition in fixed eyes,
Lifting distressful hands as if to bless.
（“Strange Meeting,” ll. 6-8.）

（一人が驚いたように立ち上がり、そして
しっかりとした悲しみの眼で私を認知し、
まるで祝福するかのように苦悩に満ちた両手を上げた。）
『奇妙な出会』（六～八行）

立ち上がった若者は「私」を知っているようであり、「私」を祝福するかのように迎える手は苦悩に満ちており、彼の目は「私」の到来を悲しみ、哀れむ色が見える。そして「私」はそこが地獄であることを知るのである。しかし地獄であるにもかかわらず、そこには地上で流される血も、大砲の音も、呻きの声も届かない。果たしてどちらが地獄なのだろうか。そこに暗示されていることは、戦場は地獄以上の地獄という単純な事実である。「私」は「見知らぬ友よ、ここでは嘆くものは何もない」と言葉をかける。するとその若者はそれに答え、悲しい思いを吐露するのである。

'None,' said the other 'save the undone years,
The hopelessness. Whatever hope is yours,
Was my life also;
（"Strange Meeting," ll. 15-17）

（「何もない」と、もう一人は言った、「破壊された歳月と
絶望以外は。」　君の希望が何であったにせよ、
それは私の命でもあった。）
『奇妙な出会』（一五～一七行）

この地獄では苦しむ理由は何一つとしてない、という「私」に対して「破壊された歳月と絶望以外」はお互い嘆く何物もない、と答える見知らぬ友の言葉 "undone year" は戦争によって台なしにされた自分達の人生の日々を指すとともに、「未完の日々」すなわち戦争さえなければ命長らえて各々が自己の望みを追求し全うしたであろうこれからの人生をも暗示している。希望は各々異なっても、希望があるということ自体、敵、味方を問わず若者の特権であり命であった。生前自分の追い求めた美、自分の成した行為の結果の全てが、戦争により今むなしく死ななければならないという事実こそ、まさに世の人の知らない「語られない真実」であった。

I mean the truth untold,
The pity of war, the pity war distilled.
Now men will go content with what we spoiled.
Or, discontent, boil bloody, and be spilled.
（"Strange Meeting," ll. 24-7.）

（私は語られない真実のこと、
戦争の悲しみ、戦争が醸し出した哀れさを言っているのだ。
今や人間は我々が台なしにしてしまったものに満足するだろう。
それでもまだ不満ならば、血を沸きたたせ、血を流すことだろう。）
『奇妙な出会』（二四～二七行）

人間はどこまで破壊すれば気がすむのか、これだけ血を流してもまだ満足しないのかという思いは、人間に対する、また進歩に対する不信感を呼び起こすのである。国民は文明の進歩の轍から外れて進みつつあるのに、誰一人としてその隊列をくずそうとはしない。しかし私は違ったと、見知らぬ友は言う。

Courage was mine, and I had mystery,
Wisdom was mine, and I had mastery;
To miss the march of this retreating world
Into vain citadels that are not walled.
（"Strange Meeting," ll. 30-33.）

（勇気は私のもの、そして私は不思議な力を持っていた。
英知は私のもの、そして私は支配力を持っていた。
この世界が城壁を持ぬ無力の砦へと退却して行く
行進を見棄てるだけの力を。）

『奇妙な出会』（三〇～三三行）

世界が破局に向かいつつあることを彼は知っていた。しかし死者にとって出来ることは真実で彼らの傷を癒してやることしかない。言い替えれば、真実で戦争のむなしさ、哀れさを伝えることなのであった。

Then, when much blood had clogged their chariot-wheels
I would go up and wash them from sweet wells,
Even with truths that lie too deep for taint.
I would have poured my spirit without stint
But not through wounds; not on the cess of war.
Foreheads of men have bled where no wounds were.

（"Strange Meeting," ll. 34-40.）

（そして彼らの戦車の車輪におびただしい血が凝結したら
私は地上へと上って行き甘い泉の水でそれを洗い流してやろう、
とても深いところにあって血に汚されていない真実でもって。
私は惜しげもなく私の魂を注ぐだろう、
戦争の勝運にではなく、傷口もないところに。
人間の額は傷口もないのに血を流している。）

『奇妙な出会』（三四～四〇行）

この部分にはキリスト教的精神が読み取れるであろう。彼が癒そうとする人間は敵、味方の区別はない。その人間の額から流れる血は、キリストの茨の冠の下に流れる血なのか、それとも神が兄弟殺しのカインの額に付けた印なのか。

I am the enemy you killed, my friend.
I knew you in this dark; for so you frowned
Yesterday through me as you jabbed and killed.
Let us sleep now. . . .'

（"Strange Meeting," ll. 41-44.）

（私は君が殺した敵なんだ、友よ。
この暗闇の中で私は分かったのだ。君は顔をしかめたね
昨日君が私を突き刺して殺したときと同じように。
私は君の突きをかわしたのだが、私の両手は気が進まず冷たかった。
さあ、一緒に眠ろう、、、、）

『奇妙な出会』（四一～四四行）

ここでこの見知らぬ友と「私」との意外な事実が明かされる。また彼の言葉からこの「友」はあえて「私」を殺すのを控えたことすらうかがえる。最後の言葉「さあ、一緒に眠ろう」は皮肉なやすらぎと和解を暗示する。

ではこの「私」が殺した「見知らぬ友」とはいったい誰、もしくは何だったのであろうか。「私は世界で一番荒々しい美を求めてやみくもに狩りに出た"I went hunting wild/ After the wildest beauty in the world"（注十二）」と言うように、彼は美の探求者であったし、また文化文明の進歩から逸脱した道を進む世界と袂を分かつだけの「勇気」、「神秘」、「英知」、「支配力」を備えた者であった。また彼は戦争で

流された血をあがなう者であり、人間に惜しげなく自分の魂を注ぐ者であった。したがってこの彼にキリストのイメージを重ねることも可能である。これらを総合して考えるとき、そこには文明とキリスト教のイメージ、さらに言えば両者が融合されたヨーロッパ文明が浮かび上がって来るであろう。「私」は若き美の探求者を殺したのであり、またヨーロッパ文明そのものを破壊し、極言すればキリストをも殺したと言えないであろうか。そのような観点から見ると、「私」は文明そのものを破壊する戦争とも読みとることが可能となる。そのように考えれば「私」が地獄にいることも頷けるのである。

しかしこのような詮索的な読み方よりももっと素直に、この詩を戦いのため志しの半ばで斃れた不幸な若者への挽歌であり、敵同士であった兵士の死を通しての和解、ととっても良い。事実、大英博物館所蔵のオウエンの自筆原稿では、四〇行目の“I am the enemy you killed, my friend.”は「私はドイツの徴集兵だった、そして君の友達だ。“I was a German conscript, and your friend.”（注十三）」となっている。このテキストで読めば両者の関係は至極明瞭であることは確かだ。しかし「敵」と「ドイツの徴集兵」の差は、前者の「敵」がドイツの徴集兵からサスーンの「かれら」で見た反キリスト教徒（Anti-Christ）までを暗示させるのに対し、後者は連合国の敵兵としてのドイツ兵であるという意味でしか機能しない恨みがある。

サスーンは先に見た『敵』という詩で“Germans”という語を使った。そしてそれは彼の心に潜在する敵、味方の意識を物語っている。（その意味では彼はれっきとした愛国者なのである。）しかしオウエンは賢明にその語を避けた。その結果「私」がドイツ兵か、それとも「私」に殺されたのがドイツ兵か、それは不明となった。しかしそのことは大した問題ではない。それ以上にそれはオウエンの詩人としての立場と彼の戦争を見る観点を明確に我々に伝えてくれる。少なくとも「ドイツの徴収兵」という言葉を削除し、現行のテキストに決定したときには、彼には敵、味方の意識は無かったといえるであろう。兵は等しく戦争の犠牲者であるという意識の他は。

オウエンの『奇妙な出会』は第一次大戦中に書かれた戦争詩の中の最高傑作の一つであろう。第二次大戦後すぐにイギリスの作曲家ベンジャミン・ブリテンは第二次大戦の犠牲者のための鎮魂歌『戦争レクイエム』を作曲したがその多くの部分にオウエンの詩を採用した。この詩もその一つであった。しかし『奇妙な出会』という言葉とその作品のモチーフの先例は、実は彼が愛読したシェリーの『イスラムの反乱』にあることが知られている。

When I awoke, I lay mid friends and foes,
And earnest countenances on me shed
The light of questioning looks, whilst one did close
My wound with balmiest herbs, and soothed me to repose;

And one whose spear had pierced me, leaned beside,
With quivering lips and humid eyes;—and all
Seemed like some brothers on a journey wide
Gone forth, whom now strange meeting did befall
In a strange land,

（“Revolt of Islam,” canto V, xii-xiii)

（私が目覚めたとき、私は味方と敵のただ中に横たわっていた。
そして真剣な顔から問いただすような眼差しが
私の上に注がれていた。その間一人は香り高い薬草で
私の傷口を閉じ、私を落ちつかせ休ませた。

私を槍で突き刺した者は唇を震わせながら、
目には涙を浮かべ、側に寄り掛かるように立っていた。そして皆は
遠く旅立ち、今見知らぬ国で奇妙な出会をした兄弟のように見えた。）

『イスラムの反乱』（第五歌、一二～一三連）

ここに書かれていることは確かにオウエンの作品と良く符合している。彼の想像力がこの詩句に大いに刺激されたことも確かであるように思える。しかし最も重要なことは、またある意味では最も悲しいことは、オウエンはこのような状況を自ら体験したということである。ロマン派詩人シェリーは幸いにもこのような苛烈な経験を彼の奔放な想像力以外では直接味わうことはなかった。

戦争とはある意味で見知らぬもの、異質のものとの出会である。ハーディからオウエンに至る戦争詩にもこの「奇妙な出会」の主題が散見される。戦争というものが、非日常的な「出会」であり、昔ながらの平凡な暮らしの方が人間にとってより価値ある生き方であることをハーディは知っていた。ブルックは戦いを自己のアイデンティティの試金石とした。またサスーンはこの「奇妙な出会」を憤りを持って拒否しようとした。しかしオウエンはそれを絶望をもって受容したのであった。

オウエンは一九一八年十一月四日、サンブル運河渡河作戦を指揮中戦死した。休戦となるわずか一週間前であった。彼が計画していた詩集は友人シーグフリード・サスーンによって一九二〇年出版された。

（完）

注

※本稿は「奇妙な出会ーーハーディからオウエンまでの戦争詩（1）、ハーディとブルック」、『愛知工業大学研究報告27-A』の第二部である。

一. Siegfried Sasson (Memoirs of an Infantry Officer. London: Faber and Faber, 1965), p.203.
二. Siegfried Sassoon, "'They'," 1. 7.
三. Ibid., 11.10-11.
四. Ibid., 1.12.
五. Siefried Sassoon, "Enemies"
五. C. Day Lewis, A Hope for Poetry (Oxford: Basil Blackwell, 1947), p.15.
六. Wilfred Owen, "Futility"
七. C. Day Lewis, A Hope for Poetry, p.15.
八. Wilfred Owen, "Soldier's Dream"
九. Jon Silkin (ed.) The Penguin Books of First World War Poetry. (2nd. ed., London: Penguin Books,1988), pp.29-33.
十. C. Day Lewis (ed.,with a Memoir by Edmund Blunden), The Collected Poems of Wilfred Owen (New York: A New Directions Book, 1964), p. 32.
十一. Wilfred Owen, "Strange Meeting," 11.17-18.
十二. C. Day Lewis, The Collected Poems of Wilfred Owen, p.36.

テキスト

一. Siegfried Sassoon. Collected Poems 1908-1956 (London:Faber and Faber,1984)

二. Siegfried Sassoon, Memoirs of an Infantry Officer (London: Faber and Faber, 1965)

三. Wilfred Owen. (ed. C. Day Lewis with a Memoir by Edmund Blunden) The Collected Poems of Wilfred Owen (New York: A New Directions Book, 1964)

四. Wilfred Owen (ed. Dominic Hibberd) Wilfred Owen:War Poems and Others. (London: Chatto & Windus, 1973)

五. Matthews(ed.) Shelley: Selected Poems and Prose (London, 1966)

参考文献

一. James Reeves, Georgian Poetry (Harmondsworth, England, Penguin Books Ltd.,1962)

二. Tom Paulin, Thomas Hardy:The poetry of Perception,(2nd ed., Macmillan, 1986)

三. ジョン・マクドナルド著、村松（監訳）『戦場の歴史』、川出書房新社（東京）、一九八六年

四. 金子常規『兵器と戦術の世界史』、原書房（東京）、一九七九年
「戦争の世界史」、『歴史読本ワールド・特別増刊・八七-四』新人物往来社（東京）、一九八七年

五. 渡辺昇一『ドイツ参謀本部』中央公論社、（東京）、一九七四年

（受理　平成四年三月二十日）